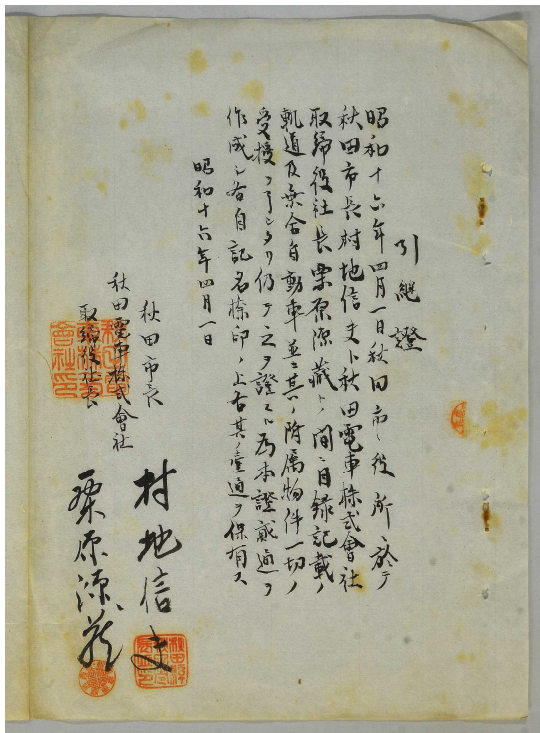


## 市中を走る路面電車

秋田市における路面電車は、大正11年に秋田電気軌道株式会社（のち秋田電車株式会社）により、秋田市新大工町10番地（現在の秋田市保戸野鉄砲町）と南秋田郡土崎港町上酒田町10番地（現在の秋田市土崎港中央一丁目）の区間（約5.3km）で運行されたのが始まりです。

その後、昭和16年に秋田市に移管され、この年から秋田市の交通事業、いわゆる「市電」として多くの市民に親しまれました。



左の文書は、昭和16年4月1日に交わされた「<sup>ひきつぎしょう</sup>引継証」です。鉄道軌道や車輛、バスなどが秋田市に移管されています。

市電となった路面電車は、昭和25年に新大工町から広小路を經由して秋田駅までの区間が延長され、土崎までの総延長が7.3 kmとなりました。このことにより、市電の利用者は飛躍的に増加し、16両の電車が20分間隔で正確に運行され、市民生活に欠くことのできない公共交通に発展しました。

「昭和16年 市電二関スル重要書類」より

右の写真は、昭和30年代の広小路の様子です。右側の大きな建物と塔は、「木内デパート」です。道路の真ん中を、路面電車が2両走っているのが見えます。

市民の足として親しまれてきた市電ですが、自動車の普及により、明治22年の馬車鉄道に始まった秋田市の路面電車は、昭和40年に約70年の歴史に幕を下ろしました。



広小路を走る路面電車